

おせっかいの宗旨

私が東京でご奉公を学んでいた35年ほど前の話です。青年会のリーダーとして活躍していた、私より少し年上のご信者が、「佛立宗はおせっかいの宗教だから、他人の面倒をよく見ろとジーちゃんに言われた」と話すのを聞いて、とても強い違和感を覚えました。

当時の東京の乗泉寺は、戦後の宗門を強力に牽引された十五世講有日晨上人の、時代を読む鋭い薫陶を受けたお弟子やご信者ばかりで、学びの多い環境でした。「おせっかいの宗教」と教えたジーちゃんも、そんな百戦錬磨の弘通の戦士の一人でしたから、本来それはご自身の体験からにじみ出た重い言葉です。しかし、まだ二十歳過ぎだった私は、洗練されたスマートさをご奉公に求めています。ゆえに騒がしいオバチャン達のイメージが重なる「おせっかい」という言葉に、抵抗を感じたのだと思います(失礼。若い頃の印象です)。

今は「おせっかい」の大事が分かります。未婚者の増加や晩婚化はもちろん、子育てをする地域環境の変化や高齢者の孤独死の問題も、「おせっかい」の減少と無縁ではないでしょう。辞書を引くと、「余計な世話をやく」「他人のことに不必要に立ち入る」等、あまり良い意味のない言葉ですが、そうして疎まれても「相手のためにお世話したい」と果敢に介入する人たちが人情味ある国民性を育て、かつては近隣が相互に助け合うコミュニティーを形成したのです。

そもそも、お祖師さまが手本にせよと仰せの不軽菩薩は「おせっかい」の極みです。誹謗され、暴力を振るわれても相手を敬い、「ご信心をすれば、あなたも仏になれる」と愚直に呼びかけ続けるのですから、「やる気のない人はほっとけばいいのに」と普通は呆れます。しかし、嫌がられても挫けず、世話を焼けるのが慈悲心で、その実践でお祖師さまは妙法弘通の端緒を開き、我が友のジーちゃんたちも戦後の弘通史に確かな足跡を残します。つまり断られても嫌われても、いつかご信心をして幸せになって欲しいと根気よくお世話が出来るのが、ほんものの菩薩行を学ぶ佛立信心の真骨頂なのです。

ところで最近、他の人のお世話を嫌うご信者が目立つように思います。「御導師に直接話すよう伝えました」「あとはお講師、お願いします」といった、丸投げのご奉公が増えています。御会式や当番ご奉公に誰も誘わず、一人で来る役中さんもいます。事例はいろいろありますが、数字に表れたものの一つが、ここ十年程のお添講の減少です。お添講を数軒、預かって参詣されるご信者は、毎月それらのお宅に巡回し、「御講は〇日だから参りなさい」「参れないなら、せめてお添講して功德を積みなさい」と教えていた訳で、それが新たな参詣者や席主を育てる裾野にもなっていました。そんなお世話をする人が減り、自分の添講しかしない役中が増えれば、これは同時に何年も御講参詣を意識しないご信者や家族の増加を意味します。御講不参でご信心を育てるのは困難です。ゆえにこうしたお世話不足は、組の後継者不足を発症します。手始めに「御講に参ってもらおう」とおせっかいを焼いてください。組に元気が出る基本です。

(『松風寺月報』平成31年4月号)